

## 第二 1907年「癩予防二関スル件」

族と暮らしたり、家の外で家族や共同体に扶養される者、の四形態にまとめられる。以下、それぞれの生活形態について検討を加える。

### 1. 中世非人の系譜

これまでの先行研究によって、中世には主として奈良や京都をはじめとする畿内近国の交通の要所に非人宿が形成され、「癩者」がその中に編入されていたことが指摘されている。非人宿は内部に階層性を持ち、「癩者」はその中で最下層に位置づけられ、非人長吏と呼ばれたトップ集団に支配されていた。

宿の中での「癩者」は下級宗教者として法名を持ち、寺社などで行われる非人勧進の際には、他の非人よりも多くの喜捨をあつめた。その背景には「癩」は仏罰による病であるという考え方とともに、文殊菩薩が時に最も穢れた存在である「癩者」に化身して現れるという、いわば「聖」と「賤」との両義性を認める考え方があったことが指摘されている。

このような中世「癩者」の生活形態は、近世以降も京都と奈良では、小規模ながらも継承された。京都では鴨川東岸の物吉村、そして奈良では北山十八軒戸と西山光明院に居住した「癩」患者である。

京都の「癩」患者の集住地は「物吉村」と呼ばれた。それは「癩」患者が洛中洛外を「ものよし」と言祝ことほぎながら歩いたため、「癩者」を「ものよし」と呼び慣わすようになったことにゆえんする。物吉は中世には清水坂の非人宿に所属していたが、中世末から近世はじめにかけて、清水坂から分離する。江戸時代の史料には、物吉村の中にある長棟堂清円寺と号する、浄土宗寺院の下級宗教者として登場する。物吉村は男女混住で、年に何回か洛中洛外と周辺地域を節句勧進する他に、敷地内で畑作や草履作りをした。

物吉村は堀に囲まれた空間で、内部には本堂の長棟堂の他、安倍晴明を祭った晴明社と、梅の名木があった。本尊の阿弥陀像は洛中阿弥陀巡りの札所になっていたこともあり、観光名所として江戸時代の京都観光案内書にも登場する。

物吉勧進については、「京洛中洛外場帳」（1833年）という物吉の勧進場を記した史料から概要を知ることができる。作成者は「持寺」宗玄・俗名井伊惣八忠勝と、井伊兵部輔源行安の二人である。彼らは武蔵国出身で、同姓であることから兄弟か父子だろう。西国巡礼の途次に物吉村に至り、入寺したものかとも推測される。

場帳によれば、一度に勧進して歩く人数は場所や時期によっても異なるが、多くても11人で、上層部の物吉まで勧進に出ていることから、物吉村の居住人数自体、かなり少なかったことが想定される。ちなみに幕末の奈良西山光明院には3人しか居住していない。

奈良では北山十八間戸と西山光明院が、奈良市街とその周辺部をそれぞれ北と南に2分割し、勧進権を持った。北山十八間戸では毎年3月25日に文殊会を開き、持仏堂の阿弥陀如来を希望者に拝ませている。

奈良でも京都でも、このように勧進のために「癩」患者が町中を歩いており、また信仰と観光の対象として人々が訪れる場でもあった。したがって物吉村や北山十八間戸、西山光明院は、近代の